

# 京都市方言の接続助詞・終助詞「シ」の用法

船木 礼子

## 1. はじめに

現在の京都市方言では原因・理由の表現に、伝統的な関西の形式として知られるサカイニやサカイ、共通語と同じカラ、準体助詞とデから構成されているンデ<sup>1</sup>、そして並列の表現形式から発展したと考えられるシが用いられている。

(1) 駅から遠い |サカイニ/サカイ/カラ/ンデ/シ|、迎えに行きますえ。

これらの形式のうちサカイニやサカイに関しては、出自や上方文献への出現時期、承接や用法の歴史的变化などについて、亀井（1936）、金田（1976）、小林千草（1977）、小林賢次（1992）、金沢（1998）などの研究の蓄積がある。

これに対して、現代の京都市方言の原因・理由表現の接続助詞シを詳しく取り上げた研究は少ない。京都方言の辞書では大抵、接続助詞のシが取り上げられ、①並列の表現、②「から」・「ので」相当の原因・理由表現を分けて立項してはいるものの、多くは「並列」と「原因・理由（あるいは順接）」以上の説明をせず、①と②の関係には触れていない。

さらに①②とは別に、主節末（文末）に生起するシについて③「よ」相当の終助詞という項目を立てている辞書も多い。この③の終助詞シについては、「相手の注意を喚起する」（中井 2002）、「詠嘆の気持ちを表わす」（大原 2008）などの説明がある。

寺村（1984）を見ると、全国共通語（以下「共通語」）の並列の接続助詞シを分析するなかで「京都弁の特色の一つ」として（2）のような例を取り上げ、並列の接続助詞シが「理由づけを表わす」わけではなく、「（それとなく）理由をいうのに向いていると考えるべき」だと述べている<sup>2</sup>。

(2) ちょっと用事がありますし、お先に帰らせてもらいます。

（寺村 1984 の例（21））

先に挙げた方言辞書の中にも、並列の接続助詞シについて「後に続く節の原因や理由を2つ以上挙げるときに用いる」（大原 2008：67頁）と説明するもの、原因・理由の接続助詞シについて「サカイより理由付けの度合いが小さい」（中井 2002：238頁）と指摘するものがあり、本来シが原因・理由を表すわけではなかったけれども、次第に原因・理由を表す用法が固定していったために、サカイ類との間に微少な差異が生まれたのではないかと考えさせられる。

京都ではなく大阪方言に目を移すと、古くは牧村（1951）に並列のシと終助詞のシが立項されている。ここでは原因・理由の意味は挙げられていないだけでなく、終助詞（牧村は「接尾語」と呼ぶ）のシは「女の言葉」とされている。しかし現在では大

阪方言のシも様相が変わっており、「大阪弁」について一般向けに解説した「全国大阪弁普及協会」のホームページでは、「接続助詞の記述」の「シ」の項において、大阪方言でも「シ」が原因・理由表現として浸透していること、京都では従属節用法もあるが大阪方言では主節末尾につくのが一般的であること、さらに終助詞的に強調の意味でも使われていることが書かれている<sup>3)</sup>。

近年の京都市でも、伝統的なサカイニやサカイに代わってシが原因・理由の表現に頻繁に用いられている。特に若年層では、サカイを理解語彙として保持してはいるが、人によっては使用語彙ではなくなりつつあるようだ。並列の接続助詞であったシが、カラヤンデとともに原因・理由の接続助詞サカイニ・サカイに取って代わったならば、シは「それとなく理由をいう」だけではなくなっていると考えられよう。

本稿では、こうした京都市方言のシについて、特に中年層から若年層の用例や文法性判断をもとに、どのような用法で用いられているのかを詳しく記述したい。

## 2. 共通語研究における接続助詞シに関する研究概観

まず、共通語研究において接続助詞シがどのように扱われているかを概観する。

複文の前件を構成するシは並列を表し、(3) や (4) のように同時に起こる複数の事態を列挙するときに用いられる。ただし、テ形や中止形で結ばれるような、因果関係のない事態の列挙 (5) や継起的な事態の時間順の列挙 (6) には、シは用いられない。

- (3) 彼はピアノも弾くし、作曲もするし、歌も上手だ。

(参考：寺村 1984 例文 (16))

- (4) 映画は見たいし、時間はないし。

- (5) ??ショパンはポーランド人だし、1810 年に生まれた。

cf. (5') ショパンはポーランド人で、1810 年に生まれた。

- (6) ??きのう美術館に行ったし、それから図書館に行った。

cf. (6') きのう美術館に行き、それから図書館に行った。

寺村 (1984) は、シの用いられている文では、明示的ではないが、話し手が表そうとしているこれらの事態をまとめる何らかの統括的な命題が含まれていると考え、これを「統括命題」と呼んでいる。たとえば、(3) では類似する事態の列挙によって「彼は音楽の才能がある」(参考：寺村 1984 例文 (17)) というようなことが統括命題として想定できよう。(5) や (6) にはこうした統括命題が想定しづらい。つまり、シで列挙された事態は話し手の考える統括命題で関係づけられており、また聞き手が統括命題を推論したり理解したりするための「根拠」として機能するのである。このため、シで示される事態間には因果関係はないが、それらの事態と統括命題との間には因果関係が含意される。

因果関係がより濃く現れるのは、(7) (8) のように、列挙されてシでマークされた事態が、話し手による統括命題の根拠として働き、主節の統括命題を導いている場合

である(8)のように統括命題である主節が省略されている場合も同様である)。

(7) 体に良くないし、僕はタバコをやめた。

(8) タバコは体に良くないし、小遣いも少ないし、うちには子どももいるし。

このように前件と後件として結ばれた事態と統括命題との関係は、論理的に前件(原因・理由)が統括命題である後件(結果・結論)を導くと捉えられた、因果関係にあるものといえる。(7)のように根拠となる事態が文中に一つしか挙げられていない場合でも、シがもともと複数の事態の列挙を表す形式であるため、根拠となる事態が複数あることが含意される。根拠となる事態が複数あるということが証拠固めとなり、これを理由として、統括命題である結論や結果が導かれやすくなるのである。

前田直子(2005)はさらに、シが因果関係の「因」もしくは「果」にあたる事態を、それも判断のレベルのモダリティ形式が入る、独立度の高い従属節として複数並べていることに注目し、このことがシに理由の用法が生まれる(婉曲な理由と解釈される)基盤となっていることを説明している。また、シがつなぐ従属節がこのように独立度の高いものであることによって、主節にあたる部分(寺村のいう「統括命題」など)が省略でき、こうした主節(統括命題の部分)の省略が、シの言いさし用法につながることを論じている。このことは、並列の接続助詞から原因・理由の表現への意味の拡張が起り、さらに終助詞的な用法(並列も原因・理由も表さない用法)へと広がっていく原理として、京都市方言のシにも共通する重要な指摘といえる。

### 3. 京都市方言の接続助詞シ

ここからは、京都市方言の中・若年層以下の世代で用いられているシの用法について、記述する。老年層・中年層はサカイがまだ使用語彙であるが、若年層はサカイを理解語彙として保持しつつも、使用語彙として実際の会話で使うことが減ってきている人もいる。こうしたサカイ系の接続助詞のゆるやかな衰退傾向の中で、シがサカイ系のどの用法を担うようになり、またサカイ系にはないどのような用法を獲得しているかを明らかにしたい。

筆者は京都市方言のネイティブではないので、京都市方言ネイティブのインフォーマント3名(A:若年層、B:中年層、C:老年層、いずれも女性)に2003年、留め置き・書き込み式アンケートで文法性判断を依頼した。さらにその内のインフォーマントAと、もう一名のインフォーマントD(中年層女性)に2006年と2008年、面接調査を実施して、共通語の例文の方言訳や文法性判断をしていただいた。インフォーマント情報は次の通りである。

インフォーマントA:若年層女性(初回調査時26歳)・中京区在住

インフォーマントB:中年層女性(調査時40代)・中京区在住

インフォーマントC:老年層女性(調査時60歳)・中京区在住

インフォーマントD:中年層女性(初回調査時45歳)・北区出身、左京区在住

この他にも、2003~2006年頃に筆者が京都市内において自然傍受法で得た若年層

の実例も随時示す。また、方言文法研究会編（2010）に筆者が報告した京都市方言の原因・理由表現のデータ（Dのデータ）から引用する際には〈報告書〉と表示し、例文番号を付す。

以下、京都市方言の用例を示す際は、引用の場合を除き、読みやすく意味が理解しやすいように漢字ひらがな混じりで表記し、注目すべき部分に傍線を引く。文脈情報を補足するときには〔 〕で、わかりにくそうな方言語彙に共通語訳をつけたり省略された内容を補足したりするときは、例文の後ろに（ ）で示す。なお方言文法研究会編（2010）の例文も、この方式の表記に置き換えている。

### 3.1. 並列の接続助詞としてのシ

まずは、京都市方言のシの並列の用法から確認する。

共通語の接続助詞シは、因果関係が含まれる統括命題が想定できれば、前掲（3）（4）のように、述べられる複数の事態が同時に両立しない場合でも適格である。京都市方言の接続助詞シも、複数の事態を列挙する用法を持っている。

（9）あの子はピアノも弾くし、作曲もするし、歌も歌わはるえ。（＝（3））

構文的には、（10）のように、並列のシの節がデの理由節内に埋め込まれる場合には使われない。

（10）\*あの図書館は暑いし、うるさいしで、勉強にならへんかった。

また京都市方言では、（11）や（12）のように、複数の事態が同時に平行して存在してはいるが、両立できない相矛盾するものである場合、接続助詞シによって複数の事態を列挙することができない。複数の事態を両立しないものと捉えるならば（11'）や（12'）のように事態と事態の関係を逆接の関係にしなければならない。

（11）\*映画は見たいし、時間はあらへんし。（＝（4））

cf.（11'）映画は見たいけど、時間はあらへんし。

（12）\*親は期待したはるし、（せやかて）就職は厳しいし、どうにもならへんわ。

cf.（12'）親は期待したはるけど、就職は厳しいし、どうにもならへんわ。

つまり京都市方言のシは、列挙する事態と統括命題との間に原因と結果、理由と帰結などの因果関係を含んでおり、またシによって示されるそれぞれの事態は統括命題との間に同じ論理関係（因果関係）をもっていなければならないようである。「河豚は食いたし、命は惜しし」のように、単に複数の事態が並行しているだけで、内容的に矛盾していたり同時に実現することが叶わないような場合には、それぞれの事態と統括命題との間に同じ因果関係が成立せず、京都市方言のシは使えないのだろう。

このように、京都市方言のシは並列の関係にあり、かつ相互に矛盾のない事態だけを取り上げる、共通語のシよりも並列の用法が狭いものといえる。このことには、次に述べる原因・理由表現としてのシの用法が確立していることが関係して、並列でも理由の複数性が強く働いていることが要因となっているのではないだろうか。

### 3. 2. 原因・理由の接続助詞としてのシ

京都市方言においてシが原因・理由をどの程度まで表現できるのかについて、後件の内容の特徴や人称制限（3. 2. 1.）、述語用法（3. 2. 2.）から探ってみる。

また、原因・理由の接続助詞としてのシがもつスタイル上の特徴も3. 2. 3. でまとめる。

#### 3. 2. 1. 後件の内容の特徴や人称制限

堀池（1999）によると、共通語のシは、話し手の想定する統括命題を導くために話し手が根拠とみなすものを列挙するので、後件にはほかでもない話し手がそう考えているのだということを表す内容が出現しやすいという。共通語のシで、後件に行為要求（命令など）や詠嘆が出現しやすいのはこのためである。また、前件に理由、後件に意志性のある事態が述べられる場合は、後件の行為を行う／行った理由は、行為者である人物が最もよくわかっているので、後件の意志の主体である人称（主語）は三人称よりも一人称のほうが自然だという。

このような共通語のシについての特徴を、京都市方言のシでも確認してみよう。

後件が行為要求や詠嘆の場合は、問題なくシが使われる（(13) (14) (15)）。

(13) あかちゃんが寝てるし、静かにして。（後件：行為要求・依頼）

(14) 危険やし、エスカレーターでは遊ばんといて。（後件：行為要求・禁止的依頼）

(15) いつまでたってもその癖は直らへんし、困った人やなあ。（後件：詠嘆）

後件が意志性のある事態である場合、人称の偏りはなく、(17) のように三人称主語でも使用される。

(16) 体に良うないし、うちタバコやめてん。（後件：意志性のある事態・一人称）

(17) 体に良うないし、あの子タバコやめはってん。（後件：意志性のある事態・三人称）

では後件が行為要求や意志性のある事態ではなく、確定的事態である場合はどうか。後件が状態的事態である（18）と（19）はどちらも自然であるが、（20）と（21）のように後件が無意志的事態である場合は三人称主語の適格性がやや落ちる。

(18) うち、無事に就職決まったし、最近機嫌ええねん。（後件：確定した状態的事態・一人称主語）

(19) あの子、無事に就職決まったし、最近機嫌ええねん。（後件：確定した状態的事態・三人称主語）

(20) うち、寝坊したし、待ち合わせ時間に遅れてん。（後件：確定した無意志的事態・一人称主語）

(21) ?あの子、寝坊したし、待ち合わせ時間に遅れてん。（後件：確定した無意志的事態・三人称主語）

確定した無意志的事態を扱い、かつ三人称主語の場合にやや適格性が落ちるといって人称制限があるようだが、後件の内容による制限はなく、京都市方言のシは共通語の

並列のシよりも用法が広い。

並列のシが持つ根拠の複数列挙という特徴を排除した、因果が一对一対応の文脈でも、京都市方言では適格である（(22)～(24)）。このことから、京都市方言のシは共通語のカラとほぼ同じ、原因・理由を表す接続助詞と断定してよいだろう。

- (22) この腕時計、昨日落としたし、壊れてしもたんや。（原因の特定）  
 (23) 定価が一万円やし、消費税込みで一万五百円や。（計算的因果関係）  
 (24) これは酸やし、試験紙は赤うなるで。（法則的因果関係）

### 3.2.2. 述語用法

共通語のカラには、断定形式のダを伴って文の述語となる用法がある（述語用法）。京都市方言のシも、こうした述語用法が適格である。

- (25) 話者1：あー、しんど。  
 話者2：あんな いぎょうさん / いっぱい 飲むしやで。（〈報告書〉87頁、1-6-1）  
 (26) 頭痛いんは、昨日飲み過ぎたし い / や / やろ / かなあ / ちゃう?!。  
 (27) 話者1：おなかがすっきりしたわあ。  
 話者2：ヨーグルト食べたし か？

並列の接続助詞としてのシや、共通語の原因・理由のノデなどには、こうした述語用法はない。このことから、京都市方言のシは共通語のカラと同じような性格を持っているといえる。

### 3.2.3. 婉曲性・スタイル差

共通語の並列の接続助詞シは、話しことばやカジュアルな話しことば的な文体で用いられる傾向があり、論文などの改まった書きことばの中では使いにくいというスタイル上の特徴がある。これは、話し手が主観的判断によって関連があると思うものを列挙するという共通語のシの意味的特徴が、客観性を要求される論文のような論理にそぐわないことも関係していると考えられる。

一方、方言では一般的に改まった書きことばとしての方言の文体を持ちあわせていないため、京都市方言の並列の接続助詞シには上記のようなスタイル差はみられない。むしろ、原因・理由表現としてのシは「丁寧体デス・マス<sup>4)</sup>」と共起して、話しことばのなかの丁寧なスタイルでも多用されている。これは、シが複数の事態（根拠）のなかからいくつかを列挙するという並列の表現から原因・理由をそれとなく表す表現への意味派生を経たことにより、複数ある事態のうちの一つだけを挙げて全てを言わずにおく婉曲性が、対人的に聞き手に配慮した丁寧な表現として機能するからだろう。

ただし、後述する終助詞的な用法のシ（特に終助詞的なシ（2））は婉曲性がなく、ぞんざいなスタイルでしか使えないようである。

### 3.3. 原因・理由を表さない接続助詞シ

共通語のカラには、前件が後件の論理的な理由・根拠とはなっていない、理由を表

さない用法がある（白川 1995）。京都市方言のシにも、こうした原因・理由を表さない用法がある。

- (28) 5 時には帰るし、宿題でもして待ってよし。(待っていない)  
 (29) タクシー呼ぶし、はよ病院行きや。(〈報告書〉87 頁、1-5-4)  
 (30) 机の上に置いてあるし、私の財布持ってきてくれへんか。(〈報告書〉87 頁、1-5-5)

こうした例では、前件で話し手の行為や話し手に属することがらを述べ、後件に聞き手への命令・禁止・依頼・勧誘などの働きかけを行うのが典型的で、後件の事態の実現・実行に対する前提として前件が位置づけられているといえる。

また、前件を後件の前置きのなものとしている、(31) (32) (33) のような慣用的な表現でも、京都市方言のシは適格である。

- (31) 一回でええし、ピラミッドに登ってみたい。(〈報告書〉87 頁、1-5-2)  
 (32) お願いやし、お金貸してほしいんやけど。(〈報告書〉87 頁、1-5-3)  
 (33) ええ子やし、おとなしゅうしとくんやで。

こうした原因・理由を表さない用法から、京都市方言のシは共通語のカラと同様、後件に対する論理的な理由や根拠だけでなく、後件の前提や、前置きの内容を示す用法も持っているといえる。

#### 4. 終助詞的なシの用法

京都市方言のシのうち、主節末にシが生起する用例には、(1) 後件の省略と考えられるものと、(2) 後件の省略とは考えにくい、話し手の主張を強め聞き手の認識のありかたに働きかけるものがある。(1) は男女の別なく使われており、年層差もあまりないようだが、(2) は若年層に多い。

以下、この終助詞的なシを詳しく見ていく。

##### 4.1. 終助詞的なシ (1) —— 後件の省略用法

共通語のカラと同じように、京都市方言のシが文末に生起して終助詞的に用いられている場合、(34) や (35) のように前件の原因・理由を示したところで文を止め、後件の結果・帰結にあたる内容が省略されていると考えられるいさし文にあたるものや、(36) や (37) のように前件は原因・理由を表さない前置きの内容で、後件の行為指示にあたる内容を省略していると解釈できるものがある。

- (34) 私ちょっと用がありますし。(後件例：お先に帰らせてもらいます)  
 (35) そんなとこに置くし。(後件例：無くなるのだ)  
 (36) あとで、もう一回電話するし。(後件例：待っていて) (〈報告書〉89 頁、1-8-2-1)  
 (37) 五時まで駅前の喫茶店にいるし。(後件例：何かあったら呼びに来て) (〈報告書〉89 頁、1-8-2-5)

前件が原因・理由を表しているいいさし文である(34)(35)は、シの後に「…」を入れて表記したほうがしっくりくるような、シの引き延ばしなどによる「溜め」がある。こうした「溜め」は、言いにくいことを敢えて言うという行動に対するためらいを表しているのだろう。「シ…」とためらいつつも前件にあたる原因・理由は言語的に明示するが、そこから導かれる後件としての帰結・結論(話し手の希望や判断)は言わないで、シによって帰結・結論が存在することをほめめかすだけにとどめることによって、聞き手に配慮した婉曲表現となる。(34)でいえば話し手の意志や希望をはっきりと押しつけないで済み、(35)では聞き手の機嫌を損ねる可能性のある判断を口にしないでいられるのである。

これに対して、(36)(37)は3.3.で述べた理由を表さない用法が文末にあらわれたものである。理由を表さない用法では、後件に聞き手への行為指示などが述べられることが多く、(36)(37)はこうした行為指示などの後件が省略された例だと考えられる。いずれも、シでマークされた内容(前件)が示されれば、常識の範囲で聞き手に何が期待されているかが分かる。以下の例も、シでマークされた内容は後件として想定できる内容の原因・理由にはなっていないが、シでマークした内容から何を聞き手に期待しているかが想定しやすい、終助詞的な用法である。

- (38) あんたのこと、絶対忘れへんしな。(後件例:あなたも忘れないで)(〈報告書〉89頁、1-8-2-3)  
 (39) お父さんに言うたるしな。(後件例:覚悟しろ)(〈報告書〉89頁、1-8-2-4)  
 (40) 秘密をばらしたら、ただじゃおかへんしな。(後件例:絶対にばらすなよ)(〈報告書〉89頁、1-8-2-7)

またこれがさらに進んで、挨拶の定型表現となっているものもある。

- (41) [家を出るときに] じゃ、行ってくるし。  
 (42) [家に帰ってきて] 今帰ったしな。

#### 4.2. 終助詞的なシ(2)——話し手の主張を強める用法

理由を表さない用法としてのシでは、後件に聞き手への行為指示などが想定されるのだが、次に扱う終助詞的なシは、後件に行為指示が想定しにくいものである。

- (43) [描いて見せた絵を聞き手に猫だと言われたが、実は猫ではなく熊のつもりである] 猫ちゃうし。  
 (44) [聞き手に、くどくどとわかりきったことを説明されて] それぐらい、知ってるし。

これらの例がもしも後件の省略である場合、4.1.のように典型的な後件の内容が思い浮かべられるかという点、難しい。無理に後件を想定するとすれば、(43)では「なぜ猫だなどというのだ、それぐらいすぐにわかれ」、(44)では「いちいち説明してくれなくていい、ばかにするな」などが挙げられようか。しかし、むしろこのように無理に後件に当たりそうなことばをひねり出さずとも、(43)では「猫ではない」



こと、(44) では話し手が「それぐらい、知っている」こと自体を聞き手にわからせて、聞き手のそれまでの認識を変更させようと働きかけていると解釈したほうが妥当ではないだろうか。こうしたシには、聞き手に対して認識を変更するよう求める、話し手・聞き手間の認識を操作する機能があると考えるのである。

また、聞き手に対して、それまでの聞き手の認識を話し手の認識と同じものに変更させることは、すなわち話し手の主張や判断を聞き手に強く押しつけることに等しい。このため、こうしたシが強調の終助詞と似たものに感じられるのであろう。

こうした京都市方言の話し手の主張を強める用法のシは、呆れ、焦り、いらだち、怒り、反発などの、聞き手や事態に対するマイナスの感情や評価を強く表す例が非常に多い。例えば次のような例がよく聞かれる。次の例は小学校4年生男子の会話である。(45) (46) はかなり強い口調で相手に反発しており、(47) のシの文は残念そうに、本意ではないのについ寝てしまったとでもいうように発話している。

(45) 小学生1: 好きなん、誰なん? ○○(学校名)にも女おるやろ。

小学生2: そりゃおるわー。でもな

小学生1: ○○(人名)やろ。

小学生2: 論外やし!

小学生1: うせやー!(嘘だ)(京都市営地下鉄内にて自然傍受。2003年)

(46) 小学生3: おまえ、きしよい、きしよい、きしよい(と言いながら小学生4の頭を叩く)

小学生4: うわ、痛いし!

小学生3: (叩くのをやめて走り去る)

小学生4: (小学生3の後についていく)

(京都市営地下鉄内にて自然傍受。2004年)

(47) 小学生5: あんなー最近何時に寝てる?

小学生6: 7時半。

小学生5: 7時半?

小学生6: うそやって言うてるやん。10時から11時。

小学生5: おれ昨日9時に寝たし。明日休みやったら遅うまで寝てられるのになー。

小学生6: おれ昨日は特別9時に寝た。

(京都市営地下鉄内にて自然傍受。2003年)

次の例(48)は、事態に対する話し手のもてあました感情を「困る」にシを付けることで強調して表している。

(48) 食べても食べてもお腹減って困るし。太ってしまうがな。

(大原 2008 掲載)

また、「あかんシ!」などのように、誰かを(特に子どもを)注意する場面でもよく用いられる。目の前の聞き手に対して、聞き手の判断を否定したり聞き手の行動を直接的に制止したりするこの表現は、「あかん」という話し手の判断を情報提供する

ことが即ち聞き手の判断や行為を否定・禁止（制止）する行為要求になっている点で、シには原因・理由という因果の意味が無いといえる。

(49) 子ども：[手元におつりの箱がないので、大人に] おつりー。

おとな（中年層）：そこ、ないんか。そんなん、あかんし。[と言って、おつりの箱を取りに行く]

（祇園祭の山伏山の粽売り場にて自然傍受<sup>5</sup>。2005年）

(50) 子ども：[○○ちゃんの行為を見咎めて] あー、○○ちゃん、そんなんしたらあかんし！

（京都市左京区の保育園で自然傍受。2005年）

(51) 保育士（中年層）：お部屋では走ってはいけません。

保育士：[まだ走っている子どもをつかまえて] ○○ちゃん、走ったらあかんしな。

（京都市左京区の保育園で自然傍受。2005年）

### 4.3. 終助詞的なシの発展

上記(2)のような聞き手の認識や行為に対する話し手の否定的な態度やマイナスの感情・判断を強く表す用例に対して、聞き手を誉めるような話し手の肯定的な態度や、話し手自身の嬉しさや良い意味での驚きなど、プラスの、あるいは特にマイナスではない感情や判断を話し手が聞き手に押しつける（とりたてて伝えようとする）場面についてシで終助詞的に表す例は、インフォーマント A や D には不自然であるようだ。聞き手の認識を変更させる働きかけとしてプラス内容の表現をする文脈というのと、聞き手が必要以上にマイナス評価をしたり自信を持たずにいる場合に、話し手が誉めたり励ましたり良い評価を伝えたりする、(52) (53) のようなものであろう。このような例は、インフォーマント A や D は使わないという。

(52) 話者 1：[焦げてしまったクッキーを差し出しながら] まずいかもしいんだけど…

話者 2：\*おいしいし！

(53) [食べてみたら思いがけずおいしかった時に、独り言で] \*なにこれ、めっちゃおいしいしー。

ちなみに、(52) (53) とは聞き手への認識変更の押しつけ方が異なるが、インフォーマント A に次のような作例を判断してもらったところ、文脈をどのように解釈してもシは不適格で、他の終助詞を使うとの回答ばかりであった（ただし、インフォーマント A はくだけた話し方をする人ならこういう例も使う可能性があるとコメントしている）。

(54) [話者 1 も話者 2 も初めて食べる食品を、話者 1 がまず一口食べてみて]

あつ、これおいしい し / で / わ！ ○○ちゃん（話者 2 名前）も食べてみ！

(55) [何かを発見して] あんなどこにある し / で / わ！

(56) [鉄棒で逆上がりが初めてできた] やった、できた し / で / わ！

(57) [芸能人のスタイルの良さを直に見て、感嘆して] やっぱ、さすがや し

— / な — |

これらは共通語のヨに置き換えられ、話し手が認識したばかりの情報を聞き手へ提供するもの（(54) (55)）と、特に誰かに聞かせることを意図していない、話し手自身の認識変更を示すもの（(56)）、話し手自身が過去に既に持っていた認識を再認識するもの（(57)）であるが、確かに A の判断と同じく、こうした文脈をシで表す例は、2003～2008 年の調査時にはほとんど聞かれなかった。しかし、近年は京都市方言でも若年層には聞かれるようになってきている。

(58) [何かわからないが、人ばかりを見つけて驚いて] めっちゃ人いはるし！

(狂言師・茂山宗彦の TV 番組での発話、2011 年<sup>6</sup>)

ここで考えてみたいのは、シが終助詞的に使われるようになり、またその終助詞的な意味がどのように広がっていくかである。

まず、なぜ聞き手の認識や行為に対する話し手の否定的な態度やマイナスの感情・判断を強く表す場合に、終助詞的なシが使われ始めたのか。意味的な面を考えると、恐らくこの終助詞的なシが並列や原因・理由の意味を持った接続助詞であることが関わっている。聞き手に認識を変更させるには、聞き手自身の判断や行動の誤りを認めさせ、話し手側の認識を受け入れさせなければならない。このとき、理由の複数性を意味に持つ接続助詞のシを用いれば、話し手の勝手ではなく理由があるから聞き手に認識の変更を求めているのだという、話し手の行為の正当化が可能となる。プラスの感情や判断である場合、聞き手が聞き入れづらいことを言うわけではないので、話し手はここまで予防線を張る必要がなく、素直に思ったまを伝えればよい。シが終助詞化するにあたってマイナスの内容から使われた理由には、こうした接続助詞シの理由の複数性が対人関係において話し手に有利に働くことが挙げられると思う。

もちろんこれは、前田直子（2005）が共通語のシについて指摘していることと同じく、シの独立度の高さがあっての用法拡大だといえる。京都市方言のシも独立度の高い従属節を並べるものであったことから、主節の省略、従属節のいさし用法の確立、理由を表さない前置きの用法へと拡大できた。そしてさらに聞き手に話し手の認識を押しつける表現へと広がったと考えられる。

シに、聞き手の認識や行為に対する話し手の否定的な態度やマイナスの感情・判断を強く表すような終助詞的な用法が定着したあとは、その聞き手に強く押しつける表現性が前面に押し出されて、マイナスの感情・判断だけでなくプラスの感情・判断であっても、聞き手と話し手との間に認識の相違がある場合に、話し手が強く聞き手に伝えようとする内容であれば何でも扱えるようになっていったのではないだろうか。

なお、近年は共通語の若者語としてのシが全国的に定着してきたことや、大阪・神戸などでも終助詞的なシがプラスの内容の強調にも使われることなどが影響しているのか、こうした強調の表現に終助詞的なシが使われる例が少なくない状態になっているように思う。今後注意深く観察していく必要があるだろう。

#### 4. 4. 大阪方言の終助詞シとの関わり

ここで、京都市方言のシが終助詞的に用いられることに関連して、大阪（大坂）方言の終助詞シについて確認しておきたい<sup>7)</sup>。大阪（大坂）方言の終助詞シについては古くから指摘が多い。牧村（1951、1955<sup>8)</sup>）や前田勇（1961、1964、1965）の説明をまとめると、大阪方言の終助詞シには以下のような特徴があるといえる。

##### ①意味の特徴

- ・ 共通語のヨヤワに相当する
- ・ 終助詞のぜに似るが、それよりも「対外性の弱い終助詞」である（前田勇 1965）
- ・ 相手の注意を喚起する気持ち、告示の気持ちを表す

##### ②生起する位置

- ・ 「そうやし」「いややし」「いかれへんし」のように、すべてのことばの終止するところにつけることができる

##### ③音声・韻律的特徴

- ・ シーと伸ばして発音する
- ・ シのところで声が高められる

##### ④使用者の特徴

- ・ 既婚・未婚を問わず、若い女性専用の終助詞である
- ・ 男性が使う終助詞でシに相当するのは男女共用のデである
- ・ 年配者はシを上品なことばとして船場あたりでは使わなかったというが、船場でも若い女性は友人間で使い、場末や色町の専用語ではなかった

##### ⑤出現時期

- ・ 幕末頃から終助詞としてのシの例が見られるようになった

##### ⑥語源

- ・ 接続助詞（並列）のシの転用である可能性がある
- ・ 文語の間投助詞のシ（例えば「生きと生ける」など）の転用という説もある

幕末から近代にかけての例（59）～（68）をみると、大坂・大阪方言の終助詞のシは、色街の芸子や小めろ、町の嫁や下女など位相はさまぎまだが、若い女性しか使っていない。

(59) [小めろ（艶）が客（呉服屋手代）に] 此方へ食客にきられても其時にこと  
はりがいへぬといふてゞおましたシ

（一荷堂半水（元治前後か）『穴さがし心の内そと』初篇4（前田1964掲載））

(60) [娼妓が小めろに] よいかみなうけとり取てもどるのヤシよいかエわすれて  
おくれなエ （同『穴さがし心の内そと』初篇10（前田1964掲載））

(61) [芸子の妹が芸子の姉に] そしてナア今店の喜助どんがきてナアあしたハ又  
河内屋のもらい言てきたシ （同『穴さがし心の内そと』初篇13）

(62) [下女が女主人（後家）に] あんたのやうに御氣が弱ふてハこんな事ハ出来

- やしませんシ (同『穴さがし心の内そと』三篇6 (前田1964 掲載))
- (63) [下女が女主人(後家)に] ソリヤどふじや存じませんし  
(同『穴さがし心の内そと』三篇6)
- (64) [下女が婆に] 片足上ツてあるし (同『穴さがし心の内そと』三篇7)
- (65) [嫁同士で姑の悪口をいう場面。嫁(ツネ)が嫁(クメ)に] イ、エそふハ  
言われんシ (同『穴さがし心の内そと』三篇10)
- (66) [クメがツネに] しかしけふの大師巡ハきつと功德になるし  
(同『穴さがし心の内そと』三篇10)
- (67) [芸妓が客に] エ、<sup>たふ</sup>好んし旦那さう面白う無ければ往ませうか。  
(米巒笑史 1884 (明治17)『大坂穴探』第六 劇場、16ウ)
- (68) [芸妓が客に] ナニ茶肆の姉はん<sup>てん</sup>に好い様に頼んで置たさかい案じる事ハ無  
いシ (同『大坂穴探』第六劇場、17ウ (前田1965 掲載))

こうした大阪の終助詞シは、そのままの形で使用し続けられていたかというところが多い。やや時代を下って、明治後期の大阪の子どものことばを記録した資料(69)、昭和期の伊川谷(明石近郊、現神戸市西区)の方言を記録した資料(70)に例があり、こども(あるいは女の子)が使用するという位相的な条件があることや、「意を強める」働きがあること、伊川谷という播磨東端の地域にも広がっていることなどがわかる。

- (69) いかんし (いけない・ゆけない)  
そやしい (さうです)  
いややしい (いやです)

(大阪市保育会編 1903 (明治36)『大阪のをさな言葉』(前田1965 掲載))

- (70) (女童)よ、わ、意を強める詞。遠足に行くねんシ (森1951:31頁)

しかし前田勇(1974)には「市内になお残存する女性専用の終助詞「し」とあるところから、大阪の終助詞シは昭和期には既に「残存」の扱いを受ける形式と見なされていたといえそうだ。郡(1997)を見ると、大阪市方言と摂津方言のものとしては終助詞シが登場しない”(『方言基礎語彙』の章でもヨ相当の終助詞にはデとガナのみ)。つまり、大阪市内では、女性専用の終助詞シは一旦衰退し、現在の終助詞的なシはそれが女性専用という枠を外して復活したか、もしくは例えば接続助詞のシなどから発展したものが使われるようになった等の変遷が想定できそうである。

上記のシの解説や用例のような幕末・明治の大阪の終助詞シと、現代の京都市方言の終助詞的なシとは直接の比較の対象とはいえないが、あえて違いを整理すると次の3点が指摘できる。

まず意味の面では、大阪の終助詞シは、話し手が情報提供していることについて軽く言い添える程度のもので、聞き手に強く認識の変更をせまるものではない。また、取り上げる内容(話し手の感情や判断)にもプラス・マイナスの偏りはない。この点で、現代の京都市方言の終助詞的なシと異なっている。

次に韻律特徴をみると、大阪の終助詞シはシが上がるというが、京都市方言の終助

詞的なシは低く付くか、下がる（少なくとも(43)～(51)は低く付いている）。

位相については、大阪では女性専用の終助詞だが、京都市方言では男女とも使用する。

このように整理すると、直接的に大阪の終助詞シが京都市方言に伝播したとはいえない。伝播があってもおかしくないのだが、京都市方言の老年層（男女とも）の会話などからは終助詞として大阪と同じ用法でシを使用している用例が拾えないことも、大阪から直接的に終助詞シが入り込んだわけではないと考える傍証といえる。京都市方言でさかんに用いられる接続助詞シとその文末用法が、終助詞的な用法を生む土台となり、そこから文末用法としてのシが終助詞的なものへと発展し、さらに意味拡張を続けていると考えたい<sup>10</sup>。

## 5. おわりに

本稿では、京都市方言のシについて、「理由の複数性」などを軸にして並列の接続助詞、原因・理由の接続助詞のつながりについて述べた。さらにこれらが共通語のカラと同じように、理由を表さない前置きのな接続助詞としても使われていること、また前件（従属節）のみを示して後件（主節）を省略する「いいさし」用法から、終助詞的な用法が確立したと考えられることも示した。

京都市方言のシが終助詞的に用いられる場合には二種類の用法があり、一つはいいさし用法によるもので、後件の行為指示を省略しているがシによって暗にほめかされるものである。もう一つは、シでマークした内容自体が強調される用法で、聞き手に対して認識を変更するよう求めるものであることを指摘した。ただし後者の用法は、話し手が事態や聞き手の行為などに対して否定的に判断したりマイナスの感情を持ったりしていることを強く押しつける用法で用いられることが多いが、近年は話し手のプラスの評価や感情などもシで表すようになっていくようにみえることも挙げた。このように、京都市方言の終助詞的なシは、プラス／マイナスを問わず、強調の終助詞的なものとして定着する兆しがあるといえる。

また、最後には大阪の終助詞シの特徴と京都市方言のそれとを整理し、大阪から京都市に直接的に伝播した可能性は低いと結論づけた。ただし、大阪の終助詞シの盛衰についてはわからない点が多いので、今後の課題として残されている。

京都市方言のシの用法については以上のようにまとめられるが、一方で、テレビやウェブログなどを通して、共通語のシの終助詞としての例が近年若者を中心によく聞かれるようになった（栗原 2009）。このようなシの用法は、マスメディアなどを通して発信され、各地で取り込まれていく可能性が高い。京都市方言の若年層に観察される終助詞的なシも、共通語のシと形式や出現位置が同じであることから、共通語から終助詞シが取り込まれるなどして両者の区別がつかなくなっていく可能性もある。今後も注目し続ける必要があるだろう。

## 注

- (1) ノデは、改まったスタイルでなければ使用しづらいという文体的な制限がある。また、前接要素末尾の音声ガンとなるもの（否定表現のーヘン／ーヒン、義務表現のーナン、語彙的否定形式アカンなど）には、ノデは続けられない（音声的な共起制限）。ンの連続を避けるためであろう。

（例1）私、明日は行かへん [\*ンデ／シ]、よろしゅう言うといってください。（行かないので）

（例2）仕事やらなん [\*ンデ／シ]、あっち行っといってください。（やらなければならないので）

（例3）雨が降ったらあかん [\*ンデ／シ]、傘持っていきなさい。（いけないので）

こうした場合は、他の原因・理由表現形式（シなど）を使用するか、発話スタイルを共通語志向のものに切り換えて「行かないノデ」のようにノデを用いることもあるようである。

- (2) 森山（2000）も、並列表現の「て」や「し」によって原因理由をばかす述べ方もできることを指摘した上で、「（特に関西方言ではこのような言い方が多い）」と付け加えている。（6-2 順接の項、179-180 頁）
- (3) 全国大阪弁普及協会 HP「接続助詞の記述」の「し」の項はこのように書かれている。

日本語訳：「し、だから、なんだから」

解説：順接。故に。主に終助詞的に活用し、理由、強調を表す。標準語のように並列の要素を含まなくても用いる。嬉しそうな顔してやるしなあ、うち行くのんいややし、おまえなんかもうええしい、あいつ逃げるのんだけはめっちゃ早いしな、この指示書わけわっからんしい！

文末につく場合は語尾を伸ばす。通常アクセントは低音だが、嫌味として言い放つ場合は、文末での言い切りに限り高音で発音する。「さかいに」の「さ」と同系列語。京都では、きょうは暑いし行かへん、のように「さかい」と同じようにも活用する。

（<http://www.osakaben.jp/osakaben/bunpou.html#>（2011年9月28日閲覧））

- (4) インフォーマント A~D は全員、丁寧形式のオス、ドスを使用しない。
- (5) 祇園祭で自然傍受した例だが、近年はマンション住人なども運営に参加しているので、この話者が山鉦町の生粋の人とは限らない点は注意を要する。ただし、このような例は、この話者に限らず良く聞かれる。
- (6) NHK BS1「地球テレビ エル・ムンド」スペシャル、「自転車探検部スリランカの旅」2011年8月29日~9月2日放送、2012年1月3日に完全盤を放送。紀行ものの番組とはいえ全国向けのTV番組であるため、京都市方言だけを使っているとは言い難いが、茂山宗彦は「サカイ」なども多用し、アクセントも京阪式で、かなり京都らしさを保った発話をしていた。なお茂山宗彦は1975

年生で、インフォーマント A と同世代。

- (7) 終助詞のシについては『日本国語大辞典』や『日本方言大辞典』にも立項されているが、使用地域は大阪、神戸などの阪神地域だけでなく三重県、滋賀県、兵庫県加古郡、和歌山県、愛媛県などの近畿地方の広い範囲、さらには東北五県、茨城県、神奈川県、長野県なども挙げられている。また意味については「軽く念を押す」（『日本国語大辞典』）、「軽い感情を添える」（『日本方言大辞典』）などと説明されており、京都市方言の終助詞的なシ（2）のように強く聞き手の判断や行動を否定するものではないようである。本稿では、このような広域のシは取り上げず、まずは阪神地域の方言と京都市方言のシについて考えたい。
- (8) 1979年の『大阪ことば事典』講談社、2004年の『新版大阪ことば事典』講談社も、シについての記述は同じであるので、ここでは省く。
- (9) ただし、大阪の泉南に終助詞のシがあることが郡（1997：77-78頁）に報告されている。泉南で老若男女区別なくよく使われ、共通語のヨに相当するが、「もっと軽い感じ」で、「念を押して言う場合には、「シテ」（シが高ア）となる」という。シが高く発音されるという点は、先の大阪方言の終助詞シと似ている。ただし、終助詞ワに後接可能である点（例4）や、シの後にナ以外の終助詞（エやヨ）が付く点（例5）は異なっている。

（例4）「テレビ ミテルワシ（テレビを見てるんだよ）」・「テレビ ミテラシ」

「ネラレヘンワシ（寝られないんだよ）」・「ネラレヘナシ」（郡1997、下線は筆者）

（例5）「アツイワシエ・アツイワシエ（暑いんだよ）」

「アツイワシヨ・アツイワシヨ（同）」

「アツイワシナー（暑いよねえ）」（郡1997、下線は筆者）

- (10) ただし、おそらく大阪方言の影響は絶えずあったと思われる。京都市方言に終助詞的なシの土台があったところに、いつ頃、どのような意味・用法のものとして大阪のシが影響した可能性があるかを考えることは、別稿に譲りたい。

## 参考文献

- 岩崎卓（1995）「ノデとカラー原因・理由を表す接続助詞－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版
- 大原穰子（2008）『京ことばの辞典』研究社
- 金沢裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 金田弘（1976）『洞門抄物と国語研究』桜楓社（第9節「接続辞『サカイ』考」）
- 亀井孝（1936）「理由を表はす接続助詞『さかいに』」『方言』6-9
- 栗原さよ子（2009）「終助詞化した「し」」『学習院大学国語国文学会誌』52
- 郡史郎（1997）「II府内各地の方言」平山輝男編著『日本のことばシリーズ 27 大



『阪府のことば』明治書院

- 小林賢次（1992）「原因・理由を表す接続助詞－分布と史的変遷－」『日本語学』11  
-6
- 小林千草（1977）「近世上方語におけるサカイとその周辺」近代語学会編『近代語研究』5、武蔵野書院
- 小林好日（1944）「東北方言に於ける助詞『さかい』」『国語学論集（橋本博士還暦記念会）』岩波書店
- 白川博之（1995）「理由を表わさない「カラ」」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版
- 白川博之（2001）「接続助詞「シ」の機能」中右実教授還暦記念論文集編集委員会編『意味と形のインターフェイス 下巻』くろしお出版
- 寺村秀夫（1984）「並列的接続とその影の統括命題－モ、シ、シカモの場合－」『日本語学』3-8
- 中井幸比古（2002）『京都府方言辞典』和泉書院
- 中俣尚己（2007）「日本語並列節の体系－「ば」・「し」・「て」・連用形の場合－」『日本語文法』7-1
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子（2001）『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 方言文法研究会（2010）『全国方言文法辞典資料集（1）原因・理由表現』科学研究費基盤研究（C）『『全国方言文法辞典』のための諸方言の文法に関する対照研究』（課題番号 19520403）研究成果報告書
- 堀池尚明（1999）「「シ」を用いた原因・理由表現について」『筑波日本語研究』4（筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室）
- 前田勇（1964）『近世上方語辞典』東京堂出版
- 前田勇（1965）『上方語源辞典』東京堂出版（再版 1988）
- 前田勇（1961）『大阪弁入門』朝日新聞社（1977年『大阪弁』）
- 前田勇（1974）「『穴さがし心の内そと』解説」、近代語学会編4（1974）『近代語研究』武蔵野書院
- 前田直子（2005）「現代日本語における接続助詞「し」の意味・用法－並列と理由の関係を中心に－」『人文』4（学習院大学人文科学研究所）
- 前田直子・日高水穂・小西いずみ・船木礼子（2006）「原因・理由表現」大西拓一郎編（2006）『方言文法調査ガイドブック2』科学研究費基盤研究（B）「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」（課題番号 14310196）
- 牧村史陽（1951）『大阪辯集成』穂村正治・牧村史陽編『大阪辯』清文堂書店（大阪ことばの会）
- 牧村史陽編（1955）『大阪方言辞典』杉本書店
- 牧村史陽編（1979）『大阪ことば事典』講談社（2004年『新版大阪ことば事典』講談社）

森俊秀（1951）『伊川谷方言集』私家版

森山卓郎（2000）『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房

### 参考資料

一荷堂半水（1864 前後か）『穴さがし心の内そと』（前田勇翻刻、近代語学会編  
（1974）『近代語研究』4 武蔵野書院、所収）

大阪市保育会編（1903）『大阪のをさな言葉』大阪蔡倫社

米嚮笑史（1884）『大坂穴探』堀部朔良、思天堂

### 謝辞

文法性判断を要求するややこしい質問ばかりの調査におつきあいくださった京都のインフォーマントの皆様にご心から御礼申し上げます。なかでも、似ている状況をあれこれ並べてニュアンスの違いを言語化しようとする「しんどい」面接調査にご協力くださったお二人には、特にご迷惑をおかけしました。記して感謝申し上げます。

### 付記

本研究は、若手研究（B）「方言文法の視点による推量表現の変化に関する研究」課題番号 20720126（代表者：橋本礼子（船木礼子））、基盤研究（B）「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」課題番号 21320086（代表者：日高水穂）、および基盤研究（C）「日本語方言の終助詞の意味の類型に関する研究」課題番号 21520423（代表者：井上優）の研究成果の一部である。

（ふなき・れいこ 神戸女子大学文学部日本語日本文学科）